

## BOOK REVIEW

## ASEANの奇跡－平和の生態系－

キショール・マブバニ, ジェフェリー・スン著, 黒柳米司訳  
新日本出版社, 2018, 296頁



金沢大学大学院人間社会環境研究科客員研究員 永田 伸吾

本書は, Kishore Mahbubani and Jeffery Sng (2017), *The ASEAN Miracle: A Catalyst for Peace*, Singapore: NUS Press の日本語訳である。

2017年8月, 東南アジア諸国連合(ASEAN)は設立50年を迎えた。その間, 当初の5カ国から10カ国に加盟国を拡大し, また, 冷戦終焉後は域外諸大国に外交フォーラムを提供することで, 東アジアの地域秩序形成に貢献した。そして2015年末にはASEAN共同体を発足させるなど, ASEANは東南アジアに一定の平和と繁栄をもたらした。しかし, その道のりは決して平坦なものではなかった。そもそも東南アジアは「アジアのバルカン」と呼ばれるほど文化, 宗教, 民族の多様性に富むことから, 世界的にも地域協力機構が成功する条件に最も恵まれない地域とみなされていた。それにもかかわらず, ASEANが地域協力機構として成功したのは何故なのか。またグローバルな文脈において, ASEANの成功物語にはどのような含意があるのか。本書は, このような問いに対するASEANの知識人からの世界と域内市民に向けた発信である。特にシンガポールの元外交官でもあるキショール・マブバニは, ASEANのみならず世界的にも影響力のある知識人であることから, 本書の著者に適任といえよう。以下各章の概要を述べた後, 若干の論評を加えたい。

第1章「四つの波」では, 東南アジアに影響を与えたインド, 中国, イスラム, 西洋の4つの外来文化の概要を述べる。そして最後の「西洋の波」が策定した東南アジアの近代的国境は東南アジアの政治的社会的構成と幸運にも合致していたとの見解を示す。

第2章「ASEANの平和生態学」では, 設立以来のASEANの歴史を概観する。それにより歴史の理論から失敗が現実視されたASEANが, 「共産主義への恐怖」「強力なリーダーの役割」「地政学的幸運」「市場志向の経済政策」「ASEANを基盤とする地域ネットワーク」の5つの要因から成功したことを解き明かす。

第3章「ASEANと諸大国」では, 米国, 中国, EU, インド, 日本との関係について論じる。ここでは, 特に対米, 対中関係に紙幅を割いている。設立以来, ASEANは親米姿勢を基調としつつも, 米国の対ASEAN政策が一貫しないことから, ASEANの対米関係も「冷戦期」「冷戦後」「21世紀」の3つの局面において起伏のあるものになったとしている。対中関係についても「敵対的」「恋愛」「不確実」の3つの局面に分ける。そして不確実な中でもASEAN諸国は「対中すり寄り」と対決の中間に行くことに合意する必要(pp. 128~129)があり, 中国に対しては「自立的ASEANこそ中国の長期的利益にとっても最善であることを明確に」(p. 129)することの必要性を主張する。

第4章「加盟国概観」では、EUと比較しつつ、ASEAN加盟国の独自性を強調しながらアルファベット順に各国のASEANでの位置づけを概説する。濃淡はあるものの、ここでは基本的に、各国の将来について楽観的な見通しを示している。

第5章「ASEANの強さと弱さ」では、ASEANの今後の課題を検討する。まず、強さについては、加盟国間にみられる共同体意識とそれを補完する制度の形成、そして域外大国がASEANの存続に利益を見出していることを挙げる。他方、弱さについては、ASEANにはEUの独仏に相当する本来的な守護者が存在せず、さらに強固な制度の欠如が弱点を増幅する可能性を指摘する。そして何より重要な課題として域内市民の当事者意識の欠如を挙げる。続いて南シナ海領有権問題を脅威と位置づける一方で、米中間の地政学的競合から利益を勝ち取るなど、今後のASEANには危機を好機に転換できる可能性があることを示唆する。

第6章「ASEANの平和賞」では、ASEANの三大成果に「加盟国間の50年間にわたる平和」「東南アジアの人々の生活の向上」「域外諸大国の『教化』」を挙げる。これらを踏まえ、本書はASEANの将来について「政府から市民へ当事者意識を移すこと」「事務局の強化」「多文化的地域機構であるASEANを人類のための希望の灯台とすること」という3つの勧告を提示する。そしてASEANが設立50年の2017年にノーベル平和賞を受賞すれば、西洋に対して、イスラム文明と非イスラム文明の共存可能性を伝えるメッセージになると結論付けている。

本書に一貫しているのは、イスラム教徒を包摂できず危機に直面しているEUや、紛争が絶えない中東と比較して、ASEANが多文化共存を実現することで、東南アジアに平和と繁栄をもたらしていることへの強い自信である。それは「ASEANの成功は、他の社会と文化にASEAN精神に倣うことを促すために用いられるべきである」(p. 262)という本書の結びに収斂する。他方で、本書には、欧米を中心とする国際社会がASEANの成功物語を正當に評価していないことに対するフラストレーションが横溢している。本書の筆致が多分にEUを意識したものであるのもこのような理由からであろう。

また、本書は、日本がASEANとの「緊密な関係を樹立するのに失敗した」(p. 146)として、日本の対ASEAN政策に厳しい評価を下している。このように本書は、ASEANにとって日本は歴史的に警戒すべき大国の1つであることを改めて認識させる。日本の読者にとっては耳の痛い話であるが、ASEAN原加盟国の外交エリートからの忠言として真摯に受け止める必要があろう。

本書の課題については、ASEAN研究の泰斗である黒柳米司氏が「訳者あとがき」の中で網羅的かつ詳細に解説している。そのため、評者からは次の1点を指摘したい。本書は1981年7月の国連カンボジア国際会議で、ASEANが道義的理由から非人道的なポル・ポト政権の復権を主張する中国と対立した際に、米国が地政学的理由から中国を後押ししたことを、ASEANが大国に翻弄された具体的事例として挙げている。特に本書はこのことを「ASEAN諸国にとってまったくのショックだった」(p. 81)と記述することで、ポル・ポト政権の復権の一義的責任は米中にあるとしている。しかし、1979年と80年の国連総会では、逆にASEANは米国に対し、ヴェトナムによるカンボジア占領の既成事実化を防ぐため、ポル・ポト政権のカンボジア代表権維持への支持を積極的に働きかけた。そしてこのとき、米国は地政学的理由と道義のはざまに立たされた挙句、地政学的理由からASEANの働きかけに応じたのである。本書がこの事実論に論及せず因果関

係を不明確にしたことは、当該箇所の記述の妥当性に課題をもたらしたといえる。

もちろん、以上のような課題があるものの、ASEANの成功物語を、東アジア地域にとどまらずグローバルな文脈からその含意を検討する本書の試みは、国際政治のアクターとしてのASEANの新たな可能性を示唆する。また、訳者が指摘するASEANが歩んできた「現実主義者が推進する構成主義路線」（「訳者あとがき」p. 287）は、国際政治の見方に新たな視座をもたらすかもしれない。いずれにしても、本書はASEANのこれからを考える上で必読の書であることは間違いない。